

St. Luke's International University Repository

「第20号」 峰アタックに参加させてもらって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮坂, 義彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/272

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「第20号」峰アタックに参加させてもらって

聖路加看護大学 教授 宮坂 義彦
(第19号～第20号紀要委員長)

私が紀要委員会の委員長になったのは、1992年度つまり第19号の編集担当からです。本年度（1993年度が2年目で、目下第20号を編集中です。

1992年度の編集委員は内藤和子、小山真理子、菊田文夫、手島 恵、及川郁子の5氏と私の6名でした。私の紀要委員会入りは着任後2年目のことでしたから、まだ大学内のことも分からないことが多く、戸惑いでしたが、留任のベテラン及川、内藤、菊田の三氏を中心に新たに加わったエネルギー的な小山、手島の5氏がひとつになって、何の心配もなく1年間の編集スケジュールをこなしてしまいました。その仕事ぶりは手際よく実に鮮やかで、見事なものでした。編集委員一人一人の力量もさることながら、ここにも20年近い年月の間に積み重ねられてきた編集技術がきちんと引き継がれていることを知ることができました。

1992年度の委員会が新たに導入したもののうち特筆すべきことは、「原著論文の査読」でした。飯田委員長時代（1986年～88年度）に「今後査読ができるように論文が集まり、内容の質があげられることが望ましいと話がたびたびだされて」いたということですから、その頃からの熱い願いが、いま諸条件がようやくとのい7年目にしてはからずも私たちの代に実現できたことになります。そのめぐりあわせをたいへん嬉しく思います。また歴代の編集委員の方々と一つの願いで結ばれ、その一端をにない、仕事をさせていただいた幸せを私たちは感じております。

1993年度の編集委員は留任の小山真理子、菊田文夫の二氏と私のほかに、新鋭の実務派・渡邊真弓氏を迎え、全部で4名です。本年度は例年になく何人もの先生方の異動があり、これが主な理由で一挙に2名減になり、厳しいスタートになりました。本年度は、昨年度導入した査読制を手続き面で充実させることの他に、経費の節約と校正など編集事務の省力化をねらって昨年度の委員会ではたびたび話題になっていたフロッピー入稿の実現が主な方針でした。フロッピー入稿は、その面に明るい菊田先生が推進役となって進められました。関係の先生方のご協力のおかげでいずれも実現することができました。このほかに本年度の委員会は、従来やってきた執筆勧誘はやめて、研究者の自発的な投稿をまつこと、投稿締切日の厳守、紀要の年度内配布を目標にかかげて取り組みましたが、いずれもまずまずの結果を得ました。

どれ一つをとっても歴代の紀要編集委員会の先生方が高い目標をめざして一つ一つ土台を築いてくださったご協力の賜であり、年々盛んになる本学の先生方の研究活動のおかげと感謝しております。